第４回児童部会研究会（まとめ）

１．日　時　平成２４年２月２２日（水）　１４：００～１６：３０
２．場　所　守山保健所 多目的ルーム
３．内　容
　14:00　開始、挨拶
　　:10　「子どものねがいを大人たちのねがいに」 ～ 地域の中で手をつなぎあって～
　　講 師　近 藤　直 子　氏
　　日本福祉大学副学長（子ども発達学部心理臨床学科教授）
　15:10　休 憩（10 分）
　　:20　グループディスカッション
　　・先生のお話を聴いての感想等
　　・各園、施設で困っているケース、困難ケース
　　・地域の連携について、それぞれが感じていること、必要性等
　16:20　まとめ（講師より）
　　:30　終わりの挨拶

◆ 講　義

１．“通う場”があることで子どもは変わる
　①“生活の質”の大切さ～好きな活動、メリハリのある生活、仲間との活動
　②通う場があることで保護者も変わる～子どもの笑顔、ホッとできる時間、仲間の存在

２．誰にもある発達の可能性～素敵な「こころのストーリー」を保障して
　①子どもの世界を大切にするということ
　　主体性の発揮
　　意味を感じる世界に向かう主体性
　　葛藤や揺れの中に潜む可能性
　②大人や仲間がいるから可能性が花開く～おとなを、
　　仲間を、そして自分を好きになる
　　マイナスも含めてかけがえのない自分
　③子どもたちに豊かな生活を
　　充実感をもてる昼間の生活
　　安心できる朝晩の生活
　　大きくなることの喜びを実感できる生活

３．身近な地域に障害児の`通える場’を
　①10 年単位で見据える名古屋市の療育の発展
　　通う場の無かった 60 年代～肢体不自由児入所施設の外来訓練(63 年)、通園施設化
　　義務教育の保障に向け、学校も就学前の場も整備され始めた 70 年代
　　通園施設の幼児化、統合保育の制度化

通園施設が低年齢化した 80 年代～2 歳からの入園と１・２歳児療育
統合保育の拡大、18 ケ月児健診での障害発見
地域療育センター設置に向かう 90 年代～把握障害児数の拡大と共に
統合保育の数的飛躍、「親子教室」の定着
21 世紀に入り、ますますニーズが拡大
「育てにくさ」への支援
あらためて療育システムのあり方が問われている 10%の子どもを支援対象に
学童期の支援　支援費制度以降の事業所拡大、中高生-の支援も

②子育てに喜びを感じられる地域に
子どもの笑顔が保護者の笑顔に～「育てにくさ」への乳児期からの支援を
就労家庭の支援
気軽に利用できる場を～保健所・保育所・幼稚園・学校・学童保育所のネットを
障害児デイ（現Ⅰ・Ⅱ型）の位置づけ～子どもの年齢・発達、保護者の状況を踏まえたネットワークを

③防災・減災・救援活動の拠点として
障害児のための福祉避難所をどこに？

◆ グループディスカッション

■自己紹介
■参加者から困難ケースの紹介

Ａ、保護者のクレーム、パニック応対について
どうしてそんなことで？という内容で事業、保健所、区役所等へ行き激しく訴えられる。例）水筒の形など

Ｂ、子供の特性上グレーゾーンかもしれない？
叩く、社会性に乏しい、気候によって波がある
粗暴行為について行事のビデオにて現場をみせるがなかなか障害受容が難しい。
本人の兄も「自閉症」で障害児のレッテルが抵抗の原因となっているのか？

Ｃ、５歳　周囲の子供と違う
特別支援チームの派遣が行われている。
障害受容が難しい
保育園の場合「小学校に入ってしまえば・・・」「小学校に上がるまえに・・・」という両サイドの保護者心理がはたらく。

保険師のコメント
グレーゾーンの子供の相談が多い
保護者のかたはネットで情報を得ている。
「白黒つけたい」反面「認めたくない」
１歳半検診、３歳児検診

幼稚園、保育園からのコメント

事業所（保育園、幼稚園）サイドではどうしてもため
らってしまう。
保護者にうまく伝えられない。

まとめ

保護者の障害受容は今後も課題であり検討のテーマとなる。
保健所、役所など連携した見守りが必要。
適切な時期に適切な支援が必要なので情報提供の方法などが検討事項。

Ｂグループ

■先生のお話を聴いての感想等

- 大人の施設に携わっているが、大人にも通じるところがあり、新鮮に感じられた。
- ４月からの新任者だが、実際の（保育の）現場でも衣服のタグを触っている子がいて、子どもの癖は成長しようとして頑張っている姿というお話は、違う視点で見ることの大切さを教えていただいた。
- 子どもが変わって来る姿は、実践の場でも通じるものがあった。その子が主体となってできる部分を大切にしたいと思った。
- １歳半前後の親子教室に関わっているが、気になる子や教室に入れない子はいる。実はその子の親もドキドキ状態で来ている。「やっぱりここへ来ても同じだ！」、「もう行かない！」と、ならないよう半年間は母子で通園してもらっている。
  児童デイを利用している人も増え、そこの事業所がどんなところなのかを知りたくて見学に行ったこともある。やはり顔の見える関係作りは大切。

■困っているケースに関して

- 見通しが持ちにくい子や一連の流れが分かっていない子がいて、全て指示が必要。友だちとは関わろうとするが、弁当箱のふたをハンドルに見立ててずっと回していたり、一人で遊んでいるといった感じ。もう一人の子は終始キョロキョロして集中できない。いろいろと助言を受けているが、上手くいかないことが多くて悩んでいる。
- 学齢期の子で乱暴な行動が目立つ子がいて相談を受けたが、いろいろな取り組みの中で母親が変わり、母子関係が良くなったことが改善につながった。そして、その様子を見ていた別の母親が相談に来たことがある。
- 親が認めていないケースもある。知られてもいいので支援してほしいという気持ちが大切だが、なかなか難しい。グレーゾーンの人たちへの対応も必要。
- あそこに行くと話を聞いてもらえるという安心感が大切だが、心配なことを気軽に言える場所がなかなかない。
- 児童の関係者が学区単位で情報交換を行っている会議があるので、そことの連携も考える

とよいのではないか？

- 伝わり方、とらえ方の違う親がいて、こちらの意図することが間違って受け取られることがある。
- 守山区は人口が増えており、ある地域では２０年前と比較して３倍になった所もある。新しい人も多くなり、事業所も増えているので、お互いに手を結んでいく働きかけができたらよい。

Ｃグループ

- 母親と数年の関わりを持っていてもすれ違うことがある。
- 夫や祖母の応援を受けつけず一人で頑張り過ぎる母親もいる。
- 保育園がどこまで関わり何が出来るのか。どんなことを望まれているのか。
- お母さんとの関係が深まるにつれていろんな機関に支援してもらったらどうかと言えるようになった。
- 来年度から児童の法律が変わり、小学生と中高生を一緒に受け入れることが可能になったが、体格も違い危険なため同じスペースでは出来ない。
- 児童が病気や怪我の時、その病状や怪我の程度で児童デイの利用を控えてもらうかの判断・線引きが難しい。
- 利用者同士の怪我などを保障する保険を知りたい。
- 育てにくさを抱えたグレーゾーンの子供が増えているように思う。更に親自身も生きにくさを抱えているケースも見受けられる。
- 保育園だけでは対応しきれないケースが増えている。また家族を抜きにしては問題解決が難しいケースも増えている。
- 幼少期から学齢期・青年期・大人まで。またそれ以降も包括的に支援するネットワークを作っていく必要がある。
- 就学時検診で心無いことを言われた。横のネットワークが出来ていればこのようなことはないと思う。
- 現場の職員同士が交流する機会がない。
- 母親にとっては自身の子供の頃の経験も役に立たず、健常児のように将来の見通しが立たない。子育て全てが初めてのことになり余裕のない状態で日々の生活を送っている。

Ｄグループ

■先生の講演を聴いての感想

- 現在４歳児の担当をしていて、先生が４歳児を例にとって話しをされていたので、とてもわかりやすかった。
  新しいクラスになった頃は大人も落ち着いて対応で着ていなかったと思う。実際に子ども

達に関わる時間の中で少しずつ子どもの主体性を大切にして子どもの思いを大切にできるようになってきたら、子どもたちも落ち着いてきたように感じている。
指導計画などに言葉として、子どもの主体性を大切にしてと書くことはできても、いざ実践となると難しく、乳児・幼児期には一番大切にしないといけない事だと再認識した。

- 以前にも先生の話を聞く機会があり、いつも話を聞くと元気になる。
  母親からの相談が多く、子どもの障害を受け入れられない母親が多いため、子どもの良いところに目を向けるように声をかけられたら良いなと思った。
- 発達障害は知ってないと子どもにはたらきかけられないため、勉強になった。
- 「ありがとう」という言葉は大切だと改めて感じた。大切にしていきたい。
- 自分のクラスで親子ともに表情が暗くどのように関わっていこうかと難しく考えていたが、一緒に楽しむ事が大切だと感じた。
- 子どもの楽しみがみつかれば、親も明るくなっていってくれると思う。
- 個々に対応は難しいが、何か一緒にやっていってありがとうと言う言葉を言ってもらえるだけで違うと思う。
- いろんな視点で考える事が大切だと思った。
- 自分が一番大変という思いが強い母親が多く、一杯一杯になってしまっているが、相談等で対応する側の人達にも心に余裕をもって対応できれば良いのではないか。
- 職場に還元できると良い。
- 一言で言うと育児困難だけど、一人一人違ったケースをもっているので、そこにどれだけ寄り添えるかだと思う。
- 障害をもっている大人も、子どもでも、どれだけその人の良いところを見つけられるか、悪い所をどうしてもみてしまうが、良いところ探しは大切だと改めて思った。

■困難ケースについて

- 働いている母が多く、もっと長い時間まであずかってもらえると良いのにという要望がある。（具体的には夜８時くらいまで）
  経済的にどうしても夜働かないといけない親が多く、昼は保育園にあずけ、夕方迎えに行き、夜になるとベビーホテルのような所にあずけてしまうケースがあり、昼間保育園での生活は荒れている状態。
- お母さんに笑顔がみられないと、子どもも笑顔になれないので、お母さんをバックアップできるシステムがあると良いと思う。
- 祖母など気軽に相談できる場がない親が多いのではないか。
- 気軽に話しが出来る場が必要だと思う。
- 守山区は子どもが多くなってきて、保育園の待機者が多い。
- 重身の児童デイが少ない。身体不自由通園にあずけるとなると、下の子をどこかにあずけないといけないが、受け皿がない。
- 外国人の子どもが障害を持っているケース。親も仕事をすぐに辞めてしまい、なかなか定職につけない。
- 守山区は公共交通機関が不便で車を運転出来ない人は通園が難しい。
- 守山区は車を持っていない人が多い。

- パスが名鉄では使えない。
- シングルの人達は、受け止めてもらいたいという思いの強い人が多い。話しをする場所が必要。
- 母親が病院に行きたくても、あずかってもらえる所がなく、一時保育の受け入れ先も少ない。入院になれば、またさらに受け入れ先がない。
- 子どもが寝る頃に働きに出るお母さんは、結局身体を壊して、仕事をやめて昼の仕事をすると言うが、少しするとまた夜の仕事についてしまう。一番親子がコミュニケーションを取れる時間、時期にコミュニケーションがとれていない。
- 圧倒的に職員数が足りていない。慣れた頃には異動になったりして、満足のいくサービスが提供できていないのではないか。
- サポート体制の充実。ニーズが増えるばかりなのに、サポートに入る人員が圧倒的に少ないのが現実。人員を増やされることがない。減らされる事の方が多い。
- 一人でやれる事には限界があって、それが今回のような研究会で繋がりをもつ事ができるので、こういう場がもっと増えるとよいと思う。積極的に知り合う場に参加する事も大切。
- 小学校の連携、保育園との連携を図ることで、障害を持っている親子が、安心して生活できる体制の充実。
- 親は障害を持っている子どもの将来がみえなくて不安があるという悩みを抱えている人が多い。いろんなサービスや相談機関等を知る事で不安が減る事もあるのではないか。
- お母さん方の通う場、子どもの通う場が必要。
- 職員一人ではどうしようもない事も、職場で悩みを相談できる人間関係や環境ができていれば、やっていける事もあると思う。
- 支える職員が元気でないと何もできない。
- それぞれの持ち味を生かしていけると良いと思う。
- 全てを自分一人で背負わないで良いと思える環境作りが大切。

<u>先生のまとめ</u>

- 身近な場の支援では、交通事情が悪いと、ハードルがすごく大きくなる。
- 交通の便を直ぐによくすることはすぐにはできない。そこにある資源の中でどこを拠点にしたら、親さんが利用しやすくなるかを考えて知恵を出し合っていってもらえればいいのではないか。
- 外国人の問題は、言語的コミュニケーションより、絵での説明が理解してもらえる。
- 重身の受け入れ先が少ない。
- 障害をもっている子どもの親さんの中でも、8 割くらいはこちらの投げかけに受け止められる親さんだが、そういう親さんも身近に相談できる環境を作っていかなければいけない。そのうえで、受け止めきれない親さんには、どういう支援が必要かを考えていかないといけない。
- 大変なケースばかり考えていると、自分たちがやっている支援がむなしく見えてくる。

- 自分達がやっている支援を正当に評価できにくくなっていくので、そこはしっかりおさえていく必要がある。
- 受け止められない親さんが抱えている背景には全部を自分達で解決しようとせずに、こういった場所で皆で考えることが大切。それぞれの区の住民性を生かしていく事が大切。
- 区や学区によって親さんの抱えている生活の質が違うため、抱えている問題も違ってくる。
- 今ある機関で何がやれるかを考える。
- 診断がはっきりついていない子の親さんへの支援で、苦労されているのが実態だと思うが、そういう方達のかなりの部分は保健師さんが把握していることが多いと思う。
- 保育園や幼稚園だけが専門機関に紹介する窓口ではなく、例えば、保健師さんが園に様子を見に行ってくれるだけで違う。ちょっとお母さんと話しが出来る環境をつくるだけで、話しの受け止め方も違ってくる。それが、自宅でならなおさら、お母さんも話しやすくなる。そうすると、現場で働いている人達の負担が軽くなると思う。
- 地域マップを作ることでお互いの顔が見えて、情報の交換もできるし、つながりが出てくる。共同の作業を通して、お互いの顔が見えてくると協力できるようになる。顔が見えない事業所とは不信感が強く協力が難しい。
- 障害と診断される前は母子保健、子育て支援になるが、診断が下ると障害支援に切り変わり、そこに大きなハードルがあるので、低いハードルで障害支援との取り組みができるとよい。